

バウムテストにおける枠づけ効果 — バウム表現の差異と枠づけ体験を通して —

本研究では、個別法で検査者が被験者の眼前で枠づけを行った場合のバウム表現と、枠づけをしなかった場合のバウム表現にどのような差が生じるのかを明らかにすることや、描画後の面接調査によって得られた被験者の語りを検討することによって、枠づけの意味、そして枠づけ体験が描き手にとってどのような体験となっているのかについて検討し、枠づけ効果を明らかにすることを目的として、枠づけ法を用いたバウムテストと枠づけ体験に関する面接を実施した。その結果、量的に検討した場合には、枠ありと枠なしの間でバウム表現に大きな差異は生じなかった。しかし、バウムの質的検討では、枠づけが描画空間を強く構造化させることや、自己と外界の関係性が顕在化されて幹や枝などの外界や他者との相互作用を象徴する部分に変化すること、そしてその変化の仕方には個別性が強く存在することが示唆された。また、被験者の眼前で枠づけをすることが、その個別性を促進することも示唆された。

本研究の課題としてはまず、サンプル数が少ないことが挙げられる。バウム表現の差異を数量的に検討するならば、さらに多くの被験者に対して調査を行うべきであっただろう。また、枠づけ体験に関する面接における質問項目の妥当性に問題があるのではないかと考えられる。質問項目は独自に作成したものを使用しているが、それらを使用する根拠が乏しい。そしてその面接で得られた語りも、詳細に分析をすることなく、少しの考察を加えるのみになっている。今後は面接で得られた語りを、M-GTAやKJ法などの分析手法を用いて分析し、枠がある用紙による描画体験や、枠づけ体験がどのような体験となっているのかを当事者の語りから検討することが望まれる。